日本環境心理学会

第 15 回大会・総会　プログラム

2022 年 3 月 12 日（土）10:00〜

オンラインカンファレンス

参加費無料（要事前申込）

タイムテーブル

10:00 〜 12:00　ワークショップ：『大学生のオンラインの居場所を考える　— リアルな居場所研究の知見から —』

企　画　：広田 すみれ（東京都市大学）
大谷 華　　（駒澤大学）

話題提供　：大久保 智生（香川大学）
白川 真裕　（早稲田大学）
大谷 華　　（駒澤大学）

昼休み（運営委員会）

13:00 〜 14:30　研究発表 1

14:45 〜 16:00　研究発表 2

16:30 〜　総会・表彰・クロージング

1　今大会の開催形式について

今大会は，ワークショップ，個別研究発表，総会のすべてをオンライン（リアルタイム）で実施いたします。参加は無料ですが，事前のお申し込みが必要です。大会用参加用の URL および ID とパスワードは，参加申し込み後に電子メールにてお知らせいたします。

参加申し込みフォーム（Google フォーム）
`https://forms.gle/Y52WALUWo1M1HQXA8`
参加申し込み期限：2022 年 3 月 12 日 (土) 13:00

2　大会参加に必要なソフトウェア環境について

今大会のワークショップ，個別研究発表には，いずれもオンラインミーティング・ツールの Zoom を使用します。Zoom のインストールや環境設定などは事前にお済ませください。また，個別研究発表はテーマごとに設定したブレイクアウトルームで実施いたします。古いバージョンのソフトウェアでは一部機能が正しく動作しない場合がありますので，Zoom の最新バージョンへの更新をお願いいたします。

Zoom のダウンロード：`https://zoom.us/download`
Zoom サポートページ：`https://support.zoom.us/hc/ja`

3　参加者の皆様へ

- Zoom ミーティングの表示名（ユーザー名）を「**氏名_所属**」の形式に設定してください。
- 会の円滑な進行のため，Zoom ミーティングへの参加時には**マイクはミュート**に，**ビデオは停止**にしてください。

マイクとビデオの設定

- 一般参加者による Zoom ミーティングの**録画・録音は禁止**いたします。

  ※ミーティングの録画・録音は大会運営事務局の管理の上で行います

4　発表者の皆様へ

- セッション開始の**5 分前**までに入室してください。
- Zoom ミーティングの表示名（ユーザー名）は，氏名の前に「*」をつけ，「***氏名_所属**」としてください。
- パラレル・セッションにおける個別研究発表の時間は 1 件あたり 15 分（発表 12 分，質疑 3 分）です。発表時間には，画面切替などの操作時間も含めます。時間内に発表を終えられるよう，Zoom の操作方法を含め，事前に十分なご準備をお願いします。
- 発表時は，**ミュート解除**と**ビデオの開始**の設定でお願いします。発表が終わりましたら，再び**マイクをミュート**し，**ビデオを停止**してください。また，画面を共有した場合は**画面共有を停止**してください。
- Zoom ミーティングを個別に録画・録音しないでください。

  ※ミーティングの録画・録音は大会運営事務局の管理の上で行います

5　若手優秀発表賞

第 13 回大会より，優れた若手研究者の研究発表に対する「若手優秀発表賞」が設けられています（副賞：奨励費 金壱万円)。若手優秀発表賞の選考対象者は，主発表者で次のいずれかの条件に該当する方です。

a) 大学院（修士・博士）在籍者（学部生で大学院への進学予定者も含む）

b) 博士課程修了後 3 年以内で，かつ，常任のポジションに就いていない者（学振 PD 特別研究員を除く。任期付き特任職も対象外）

※非会員の場合，発表申し込みと同時に学会への入会が必要です。

ワークショップ【10:00〜12:00】 **会場：zoom メインルーム**

大学生のオンラインの居場所を考える

―リアルな居場所研究の知見から ―

企　画

広田 すみれ（東京都市大学）・大谷 華（駒澤大学）

司 会

広田 すみれ（東京都市大学）

話題提供

大久保 智生（香川大学）
白川 真裕（早稲田大学）
大谷 華（駒澤大学）

要 旨

2020 年 3 月から 1 年余り，新型コロナウイルスが猛威を振るい，リアルな人的交流が抑制され，大学もキャンパスの閉鎖を余儀なくされた。その後も，感染状況に対応しながらインターネット環境とリアル空間での活動が併用されている。緊急措置として急激に広範に利用されたインターネットによる教授・学習は，環境整備や対応に不備は残るものの，不都合な点だけでなく，学生への個別対応が容易になり学習が促進されるなど，多くの利点も見出された。

一方，リアル・キャンパス閉鎖が長引くなかで，学生たちは不安や孤独感を訴えた。その原因の一つに，リアル・キャンパス喪失が「居場所」不在状況を生み出したことが考えられる。ことに 2020 年度の新入生は入学当初からリアルな大学空間の体験を経験せず，「大学での居場所」を見つける大きな機会を奪われた。

学校や大学を，安心できる場所，受容される場所，為すべき課題・目的がある場所と感じる居場所感が学校適応を支えるという研究がなされてきた。大学生にとって，リアル空間で他者や環境と相互交渉することに本質的で独特な意味があるのか。今後は大学教育の基本フォーマットとなるであろうインターネット環境で，どう対応することができるのか。

「居場所」の視点から，リアル／インターネット環境の大学空間を考えたい。

研究発表 1【13:00〜14：30】

座長：島田貴仁

P1-1. 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により社会活動への参加を中断した高齢者の特徴
（森 裕樹・清野 諭・山下真里・横山友里・小林江里香・服部真治・藤原佳典）

P1-2. 重症心身障害児施設における Art & Design が利用者の Well-being に及ぼす影響
（宮坂真紀子・杉山優子・横光健吾）

P1-3. 日常のごみ出しを通じた地域コミュニティ向上活動における行動継続を促す介入の設計と検証 （日室聡仁・江島直也・笹鹿祐司・後藤 晶）

P1-4. 中国のごみ分別行動における実施期間と情報接触の影響 （張 芸誼・安藤香織）

P1-5. 環境問題を意識し始める契機と環境配慮行動の関係：大学生を対象に
（杉田真緒・甲斐田直子）

P1-6. 系統的社会観察におけるバーチャル観察の適用可能性の検証
（森崎有香・雨宮 護・島田貴仁）

研究発表 2【14:45〜16：15】

座長：白川真裕

P2-1. 夜間屋外光環境に対する主観的評価と屋外行動の関係
（王 童語・山﨑 海・甲斐田直子・甲斐田幸佐）

P2-2. 枯山水庭園における左右の不均衡性が感性評価に与える影響 （稲上 誠）

P2-3. ウォーカブルな地域に住む人々のパーソナリティ特性：外向性に着目した検討
（吉野伸哉・小塩真司）

P2-4. オフィスへの異なる材質の執務テーブル導入が執務者の心理・生理に及ぼす影響　その 4
— ヒアリングによる質的データの検討—
（白川真裕・杉山真樹・恒次祐子・山本賢二・小島勇・久保田誠・松宮一樹）

P2-5. 焚き火による心理的ストレス軽減効果の検証 —注意回復理論に着目して— （永水秀明）

研究発表概要

P1 研究発表 1

P1-1（13:00～13:15）

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により社会活動への参加を中断した高齢者の特徴

森　裕樹　（東京都健康長寿医療センター研究所）
清野 諭*　（東京都健康長寿医療センター研究所）
山下 真里*　（東京都健康長寿医療センター研究所）
横山 友里*　（東京都健康長寿医療センター研究所）
小林 江里香*（東京都健康長寿医療センター研究所）
服部 真治*　（東京都健康長寿医療センター研究所）
藤原 佳典*　（東京都健康長寿医療センター研究所）

本研究では，新型コロナウイルス感染症拡大を機に健康づくりやボランティアなどの社会活動への参加を中断した高齢者の特徴を，参加継続中の高齢者との比較から検討した。東京都 X 市在住の 75 歳以上 51,176 名に郵送調査を行い，社会活動への参加経験者 10,399 名を分析対象とした。分析の結果，感染症拡大を機に社会活動への参加を中断した者は 32.9 % であり，さらに参加継続者と比して，非対面交流やスマートフォン利用の頻度，主観的健康感，運動習慣と参加中断との間に有意な関連が認められた。

P1-2（13:15～13:30）

重症心身障害児施設における Art & Design が利用者の Well-being に及ぼす影響

宮坂 真紀子（女子美術大学）
杉山 優子　（女子美術大学）
横光 健吾*（川崎医療福祉大学）

本研究の目的は，心身障害児総合医療療育センターにおいて 2013 年から 2021 年までに設置されたアートワークに対する印象，及び施設におけるアートの必要性を明らかにすることであった。本センターに所属する職員 182 名（男性 40 名，女性 138 名，その他 4 名）から回答が得られた。調査の結果，患者・家族にとって子どもの療育の場として印象改善が成され，コミュニケーション促進に役立っていると感じ，職員においてはストレス軽減や気持ちが和む等の効果が確認された。

*非会員

P1-3（13:30～13:45）

日常のごみ出しを通じた地域コミュニティ向上活動における行動継続を促す介入の設計と検証

日室 聡仁　（NEC ソリューションイノベータ株式会社）
江島 直也**（NEC ソリューションイノベータ株式会社）
笹鹿 祐司* (NEC ソリューションイノベータ株式会社)
後藤 晶*　(明治大学)

地域コミュニティにおける人間関係の希薄化という社会課題に対して，筆者らは「ごみ出し」という日常的行為を切り口に，多様な人々が集う拠点（ステーション）を市民と共に展開，全市民が「自然に・楽しく・当事者として」参画・協働する活動を試行している。本研究では活動に参加する個人の心理状況にあわせた介入によって環境配慮行動に対するモチベーションが変化するのかをオンライン実験にて検証した。

P1-4（13:45～14:00）

中国のごみ分別行動における実施期間と情報接触の影響

張　芸誼（奈良女子大学）
安藤 香織（奈良女子大学）

中国は近年ごみ分別制度を推進しており，日常生活中のごみ分別に関する情報交換も増えている。本研究では，ごみ分別の実施状況と情報接触が中国住民のごみ分別に関する意識と行動に及ぼす影響を検討する。20 代～40 代の中国住民 367 名に対しオンラインで調査を行った。その結果，ごみ分別制度を実施している，又はごみ分別に関する情報接触が多い場合，ごみ分別に対する評価が高く，ごみ分別に関する行動の実行度が高いことを確認した。

*非会員

P1-5（14:00～14:15）

環境問題を意識し始める契機と環境配慮行動の関係：大学生を対象に

杉田　真緒（筑波大学）
甲斐田 直子（筑波大学）

人間の行動には過去の経験や記憶が影響することが知られている。本研究では，「環境問題に関心を持ったきっかけ」に着目し，現在の環境配慮意識・行動との関係性について，過去の居住環境や自然体験，価値観を考慮して明らかにすることを目的とした。筑波大学生を対象とした質問紙調査データ（n=126）を用いた共分散構造分析より，自然体験や自然・環境の喪失実感がきっかけである場合には環境問題への関心が高まり，間接的に環境配慮行動を促進する可能性が示唆された。

P1-6（14:15～14:30）

系統的社会観察におけるバーチャル観察の適用可能性の検証

森崎 有香*（筑波大学理工学群社会工学類）
雨宮 護　（筑波大学システム情報系）
島田 貴仁　（科学警察研究所犯罪行動科学部）

系統的社会観察（Systematic Social Observation）とは，都市の物理的・社会的環境を定められた尺度で観察・計測する手法である。SSO は実地で調査するのが基本だが，近年では Google Street View（GSV）を用いて調査を行う，バーチャル観察に基づくものもある。本研究では，GSV と実地での SSO を比較し，どのような項目でバーチャル観察の適用可能性が高いのかを明らかにした。具体的には，すでに実地での SSO 結果が得られている大阪府の街路を対象として GSV を用いた調査を行い，計測の一致率及びカッパ係数から，両者の関係を明らかにした。その結果，歩道の有無や，歩道の舗装の有無などの調査項目では一致率及びカッパ係数が十分に高く，バーチャル観察での SSO が有用であることが示された。

*非会員

P2 研究発表 2

P2-1（14:45～15:00）

夜間屋外光環境に対する主観的評価と屋外行動の関係

王　童語　（筑波大学システム情報工学研究群）
山﨑　海*　(筑波大学理工学群社会工学類)
甲斐田 直子　(筑波大学システム情報系社会工学域)
甲斐田 幸佐*(国立研究開発法人　産業技術総合研究所)

本研究は，夜間屋外光環境に対する住民の主観的評価に注目し，屋外行動と健康との関係性を明らかにすることを目的とした。東京都在住者対象質問紙データ (n=1407) を用いた共分散構造分析の結果，因果関係を同定することはできないが，明るさと視認性は夜間屋外光に対する肯定的認知を向上させ，視認性は否定的認知を低下，グレアは同認知を向上させることが示唆された。また，否定的認知が夜間屋外行動に正の関係にあり，さらに同行動が睡眠の質とメンタルヘルス状態を低下させる可能性が示唆された。

P2-2（15:00～15:15）　枯山水庭園における左右の不均衡性が感性評価に与える影響

稲上 誠（名古屋大学）

禅の芸術の特色として，均衡の崩れた構成が魅力を生み出すと言われている。本研究では枯山水庭園を対象として，その効果を検証する実験を行った。簡易な VR 技術を用いて庭園の画像を提示し，美しさなどの感性評価のデータを取得した。庭園の不均衡性を定量化するため，画像の濃度値から重心を求め，中心からの左右方向の距離を計測した。分析の結果，不均衡性と感性評価の間に逆 U 字型の関係がみられた。この結果は，均衡の適度な崩れにより魅力が向上することを示唆している。

P2-3（15:15～15:30）

ウォーカブルな地域に住む人々のパーソナリティ特性：外向性に着目した検討

吉野 伸哉　（早稲田大学大学院 文学研究科）
小塩 真司*（早稲田大学 文学学術院）

本研究は，地域における徒歩での生活のしやすさを意味するウォーカビリティと Big Five パーソナリティのうち外向性との関連を検討した。関東在住の 1352 名を対象としたオンライン調査を実施した。ウォーカビリティの高さは郵便番号から Walk Score を算出した。ま

*非会員

た，外向性は日本語版 Big Five Inventory-2 で測定した。この尺度は外向性を社交性，自己主張性，活力度の 3 つの下位次元から捉えている。分析の結果，Walk Score と活力度との間の正の関連は，社交性および自己主張性よりも相対的に大きいことが示された。

P2-4（15:30～15:45）

オフィスへの異なる材質の執務テーブル導入が執務者の心理・生理に及ぼす影響　その 4
—ヒアリングによる質的データの検討—

白川　真裕（早稲田大学）
杉山　真樹*（森林総合研究所）
恒次　祐子*（東京大学）
山本　賢二*（株式会社イトーキ）
小島　勇*（株式会社イトーキ）
久保田 誠*（株式会社イトーキ）
松宮　一樹*（株式会社イトーキ）

執務テーブルの天板の材質の違いが執務者の心理・生理面に及ぼす影響を明らかにすることを目的として，白色メラミン，木目メラミン，クリ無垢単板の 3 種類の材質の天板のテーブルを用い，実オフィスで執務者を対象とした被験者実験を実施した。本報では，各条件の実験期間終了時に実施したヒアリングの回答を対象に，実験中の執務テーブルの使用感などに関する質的データを用いた対応分析の結果を報告する。

P2-5（15:45～16:00）

焚き火による心理的ストレス軽減効果の検証 —注意回復理論に着目して—

永水 秀明（筑波大学 人間総合科学学術院）

本研究では Kaplan（1995）が提唱した注意回復理論が焚き火にも適用されることを想定し，焚き火のリラクゼーション効果と回復特性を明らかにした。47 人の被験者を焚き火映像群，森林映像群，教室映像群に割り付け視聴実験を行った。その結果，焚き火映像群・森林映像群に安静効果があることが示された。さらに PRS を用いて分析を行った結果，焚き火映像群が「逃避」「魅了」「視野」「適合」「好み」といった回復特性を有していることが明らかになった。

*非会員